

## 第104回日本精神神経学会総会

## 教育講演

## 統合失調症の現在 進化論に注目して

加藤 敏 (自治医科大学精神医学教室)

&lt;Key words : schizophrenia, prevalence, evolutionary psychiatry, language, postmodern society&gt;

## はじめに 進化論の意義

2009年は進化論にとって記念すべき年で、Charles Darwinの生誕200周年、また『種の起源』の出版150周年にあたる。これにちなみ、進化という問題枠を考慮に入れつつ統合失調症の病態に光をあてたい。まず精神医学にとって進化論が持つ今日的な意義を総論的に述べ、広い意味の進化社会学の見地もいれ、統合失調症の起源の問題、そして統合失調症の疫学に関して最近の知見を少し展望して、最後に統合失調症の病態変遷について論じたい。

進化論のもっとも重要な点は、動物、および人間がさまざまな環境からの選択圧にさらされるなかで、種、および形態が変化し、おかれた環境に最も適応性をそなえたものが生き残る上で優位にたつという考えであろう。

Darwinによる生存競争に通じる自然選択(natural selection)の理論に対して、利己的な面が強調され、仲間、他者を配慮し思いやる利他主義の側面が考えられていないという批判がある。人間では、Dawkins<sup>9)</sup>のいう(文化、思想にあたる)ミームにより、利他主義の側面を補足する動きがあるとみることができる。種々の平和思想がそのよい例であろう。しかし、人間は言葉によって虚偽行為を乱用し、かえって利己主義が横行する面も否定できない。実際、マスコミで毎日のように報道される、詐欺、詐称などのうそをつく

という虚偽行為自体も生き抜くための適応行動である。人間の虚偽行為の源泉を系統発生的に探ると、動物や植物の擬態に求められるだろう。人間において虚偽行為は、基本的には言葉によってなされるため、動植物の場合に比べると、その範囲は拡大し、乱用されるきらいがあるといえる。

いずれにしても、さまざまな環境において、また、環境の変化のなかで生き抜くための適応行動があるという見方は、精神科臨床において人間を理解する上で有効である。Darwin<sup>9)</sup>自身、痛みや苦しみというものは常にそれ自体が適応の一形態であるという見方をしている。

実際、周囲に対する危険信号の役割を果たす不安を感じることがなかったら、動物も人間も生きていけない。その意味で、不安障害は「不適切な」という性格付けをされはするものの、今おかれた状況を回避することを指示する適応行動という意義を持っている。Kretschmer<sup>20)</sup>のいう原始反射が好例だが、ヒステリー性の退行も一種の適応行動と理解できる。そもそも学習とか認知自体も生き抜くための一つの適応行動だと言える。

Darwinの進化論が持つ今日的意義を整理すると、生き抜くための適応行動として1) 遺伝子・分子レベルの振る舞い、2) 脳神経レベルの振る舞い、そして3) 個体、種のレベルの振る舞い、さらに4) 社会・文化レベルの振る舞いが区別され、それぞれが、A) おかれた環境から個体に課

される選択圧と B) 個体特性の二つの要因のかけ合わせで決定されると図式化できる。

最近、神経可塑性、発達可塑性、あるいはレジリエンス (résilience, resilience) などといった、しなやかな内発的な力動性を内にそなえた概念が注目されている<sup>16)</sup>。これらは、生体の適応行動を特徴づける概念で、進化論の考え方の流れを汲むものといえる。また、分子生物学の領域でたんぱく質の機能の発現について、それがおかれたコンテキストに依存するというコンテキスト依存機能 (context-dependent function) という術語が使用されているのを目にする<sup>35)</sup>。このコンテキスト依存機能という考え方も、進化論の考え方の流れを汲むものといえる。しかも、これらの概念はいずれも、進化論の正当性を裏付ける可能性をもっている。

### I 統合失調症の脳体積, 社会脳

実は脳自体が自然選択の原理に従うシステムであるという見方を、Edelman ら<sup>31)</sup>が提出している。それによると、脳において神経細胞が複数発生すると、発達過程の最初の段階で、まず、動物の場合にも勿論あてはまることだろうが、神経細胞の選択がなされて、一部が削除される。さらに、学習過程において、神経回路が形成されるなかで、神経シナプスの選択・削除がなされる。

最近、統合失調症の脳の発達に関し、また正常な脳の発達に関し、神経シナプスの削除 (synaptic elimination) ないし刈り込み (pruning) という術語が頻繁に使用されている。これは、いま述べた神経シナプスにおける自然選択に対応する概念といえる。神経シナプスの刈り込みという術語で正常の脳の発育過程をあらためて述べると、そもそも正常な脳の発達自体が神経シナプスの刈り込みによって進む。実際、Huttenlocher<sup>14)</sup>によれば神経シナプスの濃度でみると、幼児期にシナプスの濃度が一番高く、その後は低くなっていき、例えば前頭葉では30~40%低下するという。このようにして、一部の神経回路が削除され、より有用な神経回路が残る。この際、

「有用な」というとき何を基準にしているのかが問題だが、さしあたりどの程度、適応に有利かということになり、より適応に有利な神経回路が残っていくといえる。健常人の至適なシナプス刈り込みの程度は、Hoffman ら<sup>13)</sup>が行ったコンピュータシミュレーションによると、脳の重量で表すと29%の減少、回路の数だと64%の減少だという。

彼らは、同じ手法により、鳥を対象に、言語能力と皮質結合との関係を調べ、神経シナプスの刈り込みによって言語活動の効率が上がるという知見を出している。また、MacGlashan ら<sup>24)</sup>は統合失調症は発達過程での神経シナプス接続の減少による障害 (developmentally reduced synaptic connectivity, DRSC) であるという考えを提唱し、その原因はシナプスの刈り込み過剰にあるという前提のもとに、コンピュータシミュレーションを行い、神経シナプスの刈り込みが40%を超えると統合失調症前駆症状、50%を超えると精神病症状、60%を超えると慢性化をきたすという大胆な仮説を提出している。要するに、神経シナプスの刈り込みが健常人よりも多いことが、統合失調症発症のリスクとなり、顕在発症はこの刈り込みが過剰になって生じるというのである。

この点に関して、わが国では鈴木、倉知ら<sup>33)</sup>が次のような興味深い知見をだしている。統合失調症患者では、前頭前野において広範囲な体積減少が認められた。そして統合失調症発症にまで至らない、前駆病態といえる統合失調症型障害の患者では前頭前野の体積が増大しているという結果が得られた。この知見に関し、次のような考察がなされる。すなわち、統合失調症ではシナプスの刈り込み過剰が生じ、その結果、前頭前野の体積減少が生じるのだが、統合失調症型障害における前頭前野の体積増大は、顕在発症の危機を前にして代償性の神経シナプスの増加が見られることが考えられる。この知見、および解釈は今の MacGlashan らの推論に一部訂正を迫るものだが、基本的には神経刈り込み過剰が統合失調症でおこっているという認識では変わらない。

最近、人間の脳は、言語、また社会のさまざまな慣習といったいわゆる文化的なものを同化する中で形成されるという側面に注目して、社会脳 (social brain) という術語が定着しつつある。比較動物学、あるいは霊長類、あるいは古生物学との比較研究では、人間において明らかに複雑な皮質の相互の接続が進化を促し、それによって前頭-側頭、前頭-頭頂回路などが形成され、そのなかで、社会的認知の制御、すなわち他人とうまく生活する、集団生活を制御するということが可能になる。このような意味で、ヒトの脳は連続的な肥大的形態発生の産物であるといわれる。統合失調症は、複雑かつ高度な脳の構造化の過程における障害とみることが可能で、この見地からは、統合失調症では社会脳を形成する遺伝子の異常が想定される。

## II 統合失調症の起源

統合失調症はいつ頃出現したのかに関するいくつかの見解を紹介しておきたい。

Burns<sup>5)</sup> は、統合失調症を社会脳の障害と考える視点から、ホモ・サピエンスが今から約10~15万年前にアフリカから別な地域への移住を始める頃に神経発達を制御する遺伝子の変化が生じ、その結果まず、社会脳の異常をきたす統合失調型スペクトラム (schizotypal spectrum) が出現したと考える。そして、この皮質神経回路の変化が非凡な創造性を促し、因習を打破して新たな発展をもたらす可能性を拓くという見方も提示する。つまり、社会脳の発達は、一方で創造性促進の要因であると同時に、統合失調症発症の危険因子でもあるという考え方を示している。

Darwin<sup>10)</sup> は、『人間の由来』において人間の言語能力に注目し、言語こそ人間の種に特徴的だと指摘していた。このダーウィンの進化論の流れを汲むイギリスのCrowが、統合失調症と言語は進化において共通の起源を持つ、つまり統合失調症は人間が言語を獲得したのと同時期に出現したことを強調し、次のように論じる<sup>6,7)</sup>。

ホモ・サピエンスの登場は、西アフリカで

10~25万年前、DNA解析によると13万7000年前とされている。人間は動物のなかで最も未熟な状態で生まれる。その発達の要は、右脳と左脳の分化・統合で、この脳の左右差、分化・統合にかかわる遺伝子として、X染色体上にある遺伝子Xq21.3が候補にあげられている。統合失調症の臨床症状は、幻聴、させられ体験などのように、右脳と左脳の不均衡、統合、また言語の病理に関係していると理解可能なものが少なくない。また、統合失調症の有病率は男性の方が女性に比べ多くて、発症年齢が男性は女性に比べ低い。そうした知見も、男性のほうが右脳と左脳の違い、非対称性が目立つという生物学的知見と対応する。以上から統合失調症の出現には右脳と左脳の分化を導く上述の遺伝子が役割を果たすと推論できる。

言語が統合失調症発症にとり重要な条件となることは精神病理学の見地からも強調されてきたことだが、言語の発生と統合失調症の出現が言語の発生と起源を同じくするという考えには、少し留保が必要だろう。Crowの説を敷衍すると、人類初のホモ・サピエンスにおいても統合失調症の有病率は現代と同じということになるが、これはあまりに性急な見解であるといわざるを得ない。統合失調症が言語の発生と起源を同じくするということは、あくまで原理的な考え方にとどまり、言語の獲得により統合失調症発症の基底条件が成立したと解釈すべきだろう。

もう一つ注目に値するのはJulian Jaynes<sup>15)</sup> という心理学者の説である。彼はエジプト文明、マヤ文明、ギリシャ文明そしてメソポタミア文明などの膨大な文献に基づき、『二院制精神の没落における意識の誕生』(邦訳『神々の沈黙 意識の誕生と文明の興亡』)と題した著作を著した。それによると、紀元前9000年から2000年の間には、人間は絶えず神の声を聞きながら神の命令に従って行動していた。新しい行動にかかわるすべてのイニシアティブは神からやってきて人間の行動が決定され、人間はこれに従って行動した。古代人が神のお告げを聞いて行動するといった振る舞いを思い起こせば、二院制精神 (bicameral

mind) と名づけられるこのようなあり方は理解しやすいだろう。二院制精神には解剖学的基礎が考えられ、Jaynes は2つの大脳半球はもともとそれぞれが独立して機能していたと考え、右脳に神の部分があり、左脳に人間の部分があると推論した (p. 141-146)。

Jaynes は、ちょうどメソポタミアの時代に神々がいなくなることを示す記録がかなりあることから、メソポタミア文明の崩壊の時期、つまり紀元前 1230 年頃に、二院制精神が崩壊し、主観的な意識の萌芽が出現したと考え、この時期にこそ、叙事詩による人間の物語り (narrative) が姿をみせはじめたとも推論している (p. 244-304)。

そして統合失調症の幻聴は、霊媒などと同様、二院制精神の時代に人々の行為決定に大きな役割を果たした神のお告げの名残と考えられる。また、統合失調症は二院制精神が部分的に顕在化した病態であると理解される (p. 520-522)。つまり統合失調症の起源は、二院制精神が崩壊し、神のイニシアティブに対し、人間の意識が芽生えだした時期、つまりメソポタミア文明崩壊の時期に求められるといえる。Jaynes によれば、プラトンの時代にあたる紀元前 400 年頃になって統合失調症にあたるものが病気として問題とされだしたという (p. 493)。

統合失調症は二院制精神の崩壊後、紀元前 400 年頃に出現し、その病態は二院制精神への部分的な先祖返りであると見做す Jaynes の見解は歴史的裏付けに乏しく、きわめて大胆な推論の性格を色濃く持つが、作業仮説として魅力的で、その意義は大きい。

### III 統合失調症の疫学知見

統合失調症はいかなる文化・社会においても近似の発病率で生じ、臨床症状は違いよりも類似が目立つということが、WHO の調査などをもとにして盛んに言われている。内科、外科疾患でもなんらかの環境因子の影響を受けるのが原則で、さまざまな時代、文化・社会で発病率が同じという

ような疾患はなく、その意味で統合失調症はきわめて特異な病気ということになる。

しかし、おおよそ 13 万年前の言語の発生と同時に統合失調症が出現したとして、その頃と現在が同じ発病率だったのか、これは大いに疑問である。また、二院制精神の崩壊後、統合失調症が出現したという Jaynes の考え方に沿えば、人間主体が自らのイニシアティブのもとに新しい行動を課せられることが、統合失調症発病の危険因子となる点からして、近代以前と以降で発病率に違いがあることは十分考えられるところである。このような見方を進めるなら、統合失調症の発病率は文化・社会によって違いがあることが予想される。

この点につき、野口と加藤<sup>26)</sup> は文献を引用しつつ論証したところだが、同様な論点は McGrath<sup>25)</sup> によっても出されている。彼は 1965 年～2001 年までに発表された 33 カ国の論文のメタアナリシスを行い、統合失調症の発病率が一様ではないことを明らかにした。1 年間に 10 万人中 7.7 人 (1 年間) の発病率から 10 万人中 43 人と、大きなばらつきがある。性差も明らかにあり、男性が女性に比べ 1.4 倍多い。また、地域差があり、都市の方が地方よりも多い。さらに、移民した人と母国在住の人を比べると、ジャマイカ島の人たちがよく知られているが、移民群の方が母国在住群より多く、4.6 倍という高い数字がだされている。

また、ここ最近の統合失調症の減少を説く研究もある。これを検証するための予備的な研究を利谷ら<sup>36)</sup> が行っているので、簡単に紹介する。1993 年 4 月から 1994 年 3 月の 1 年間と、その 10 年後の 2003 年 4 月から 2004 年 3 月までの 1 年間で、(開放病棟をもつ) 自治医科大学付属病院精神科と (関連病院で北関東の小都市に位置し、措置床をもつ閉鎖病棟と開放病棟をもつ) 上都賀総合病院精神科の外来に初診した患者の診断内訳を ICD-10 に基づき調べ、統合失調症が占める割合を比較した。

その結果、自治医科大学病院では統合失調症が 8.5% だったのが、10 年後には 6.9% に下がって

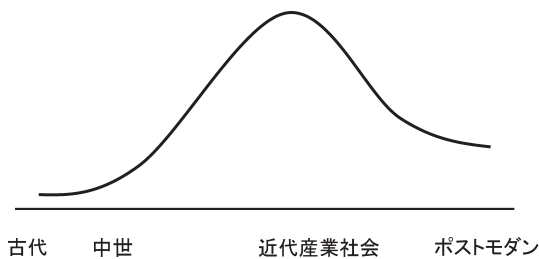


図1 人類史からみる統合失調症の経過

おり、上都賀総合病院では11%から5.4%に減っていた。この2施設のデータを加算すると、統合失調症の比率が10年前に10.7%であったのが7.1%に減っているという知見が出た。

統合失調症の比率が減った分、自治医科大学病院では特に気分障害、上都賀総合病院では気分障害に加え、老年性疾患の比率が増えており、絶対数として統合失調症が減少したとは断言できないのはいうまでもない。もっとも統合失調症の比率が減少したというこの知見は、統合失調症の事例化が減少したことを示唆するものである。イギリスなどでは既に1970年代の調査で、統合失調症と診断される事例が減少しているとする報告がある<sup>12)</sup>。こうした知見は、いわゆる統合失調症の軽症化現象と合わせ、ここ20年間でも統合失調症の病勢が弱まっていることを示唆するのではないだろうか。

きわめて巨視的に人類史から統合失調症の病勢を図式的にみると、古代は非常に緩慢だったのが、近代に入って急激に病勢が悪化し、そして20世紀の敷居をまたぐ現代にはいり、病勢がある程度和らいでいると大づかみにできるのではないだろうか(図1)。

脳の画像研究でもそうだが、統合失調症の生物学的研究において、性差を問題にしたものは少ないように思う。健康人において生物学的にも性差は大きいので、この点は重要な問題だと考えられる。発病率でいうと高齢では男性に比べ、女性にきわめて高いということがいわれている。

そこで、安田と加藤<sup>37)</sup>はDSM診断に基づき、

自治医科大学病院精神科病棟に入院した45歳以上の統合失調症高齢発症の患者(1992~2005年、計316名)の性差を調べてみた。1993年4月から1994年3月の1年。統合失調症のうち45歳以上の発症は12.0%(38/316)で、男女比は1対4.4で、女性に有意に多いという結果が得られた(Fisher直接法： $p < 0.001$ )。同様の調査を閉鎖病棟をもつ関連の精神科病院でも行くと、45歳以上の統合失調症高齢発症患者(1992~2005年、計130名)は、10.8%(14/130)で、男女比は1対13となり、女性に有意に多いという同様な結果が得られた(Fisher直接法： $p = 0.009$ )。

ここから、統合失調症の発症の年齢別のピークをみると、男性では一つの山(青年期)にあるだけなのに対し、女性では二つの山があることがわかる。もっとも45歳以降の二つ目の山は、青年期に比べ、ずっと低く、なだらかである。

#### IV spacing disorder としての統合失調症

ここでStevensとPrice<sup>32)</sup>による進化精神医学の見地からの統合失調症の理解に目を向けたい。その理解は社会・文化的文脈に根ざしたもので、精神病理学的視点からのものに通じる。統合失調症は、他人との関係をもつことに困難をきたすことを特徴とするspacing disorderに包括される。この概念のなかには、妄想性パーソナリティ障害、シゾイドパーソナリティ障害など多数の病態が含まれており、spacing disorderの内的規定は不十分なのだが、基本は筆者<sup>17)</sup>のいう統合失調スペクトラムにはいる病態といえるだろう。

StevensとPriceは、集団分裂仮説(group-splitting hypothesis)という考えかたのもとに、spacing disorderをもつ人たちが古代社会において生き抜く適応力を示した。すなわち、ある社会が大きく発展していくなかで、支配者側の動きに反発して、カリスマ的リーダーが登場して、小集団が形成され、別の場所に移住して自分たちの考えに合った社会をつくっていく。spacing disorderを持つ人こそ、この小集団のリーダー役を演じるのである。そのため、spacing disorderをもつ人

は社会の本流にはなかなか溶け込まず、いつもその外部に位置するアウトサイダーとして生きる。シャーマンなどもその例となるだろう。このようにして彼（彼女）らは統合失調症の顕在発症を免れ、社会の中で一定の場を見出し生き抜いたことが考えられる。

20世紀世紀末から21世紀初頭にかけて、日本を含む欧米の先進国で、カルト集団が多数誕生した。この集団は潜在的な形のものもあるだろうが、高度産業社会の論理とは別な論理を中核的な思想（ないし教義）にして形づくられていると考えられる。そのなかには spacing disorder に入るリーダーが少なくないだろう。実際、集団自殺に導いてしまった人民寺院の教祖ジム・ジョーンズなどは、明らかな被害妄想をいだき統合失調症圏の病理をもつ人物といえる。このように現代においても、Stevens と Price が提唱する集団分裂仮説 (group-splitting hypothesis) がそのままあてはまる事例は決して稀ではなく、spacing disorder をもつ人が社会においてマージナルマンとして役割を担うことが認められる。

筆者<sup>17)</sup>は、精神障害の病態を捉える基本視座として、いかなる精神障害においても生命力動と人格構造の2つ視座が常に重要であることを強調しているが、Stevens と Price が提唱した spacing disorder は人格構造の視座に立脚して導かれた概念といえる (p. 217-233)。そこで、spacing disorder は統合失調症を持つ人の人格に近縁な病態を包括した、筆者のいう統合失調スペクトラムと重なるものといえる。統合失調スペクトラムの人たちは、邪悪さを必然的にもついわゆる俗世間に参入することが苦手で、困難をきたす。彼（彼女）らは、邪悪な俗世間への「自然な自明性」を欠く代わりに、純粋な真・善・美といったものへの自然な感性、あるいはこう言ってよければ聖なる「自然な自明性」を持つ。そのため、統合失調スペクトラム、また spacing disorder の人たちは、俗世間にはなかなか馴染まず、思想、宗教において生きる道を拓く。

他人を前に嘘をつくことができるという虚偽能

力に注目すると、統合失調スペクトラム、また spacing disorder の人のあり方がよく捉えられるように思われる。日常の卑近な社会生活の場面を思い起こすとよくわかるが、人は他人と雑談をしていて、またうわさ話をしていて、知っている振りをしたり、知らない振りをしないと、話がうまく進まない。概して、人は毎日の生活のなかで何度か嘘をつくのが普通ではないか。「嘘も方便」という言葉があるように、日常生活において嘘は必要悪として機能している。そうした虚偽行為こそ、統合失調スペクトラム、また spacing disorder の人が得意とするところではない。

Smith による『うその進化論』という興味深い著作がある<sup>29)</sup>。そこでは、人間の最初の言語使用は嘘であったことが主張され、女性が男性の品定めのために互いに話す場面が考えられている。この考え方は、多分、世俗社会における言葉の最初の私的使用を念頭におくと理解できるのではないか。他方で、もう一つの言葉の原初は先ほどふれた二院制精神の時代にさかのぼる、神からの言葉とみなせる。公的な言葉の原初が神からの言葉であり、私的な言葉の原初は他人についてのうわさ話に求められると考え、『嘘の進化論』の論点はおおよそ納得がいくのではないだろうか。

確かに女性の方が男性に比べ、うわさ話のような私的場面になると、よどみなく雄弁に話しかかなか止まらない。井戸端会議がその好例である。うわさ話では、何かを正確に伝えるというより、あることを話しながら、相手を欺き、翻弄させる効果を持つことも少なくない。つまり、うわさ話は虚偽を内に含んでいるというあり方をしている。うわさ話を聞く人は、そこには嘘があるのではないかということを頭におきつつ、ある程度の距離を取っておく必要がある。別な言い方をすれば、うわさ話を聞く際、その中に含まれているかもしれない虚偽を疑う気持ちを棚上げし、無視することを要求される。この虚偽の棚上げ、無視を虚偽の遮蔽ということもできるだろう。人は他人に対し嘘をつくことからなる虚偽能力に加え、虚偽を無視する虚偽遮蔽能力も要求されるのである。さ

もないと、人の話を聞いていて、そこに嘘があるのではないかと絶えず猜疑的になってしまい、ほかのことに注意がいなくなってしまうことになる。統合失調症や妄想性障害では、他人の会話を聞いていて自分のうわさをしていると関係付けをする現象から推察されるように、この虚偽遮蔽能力に障害をきたしていると考えることができる。

## V 所有 (property) の問題枠

虚偽の問題枠に引き続いて、所有 (property) という問題枠から統合失調症に光をあてたい。社会学者 Attali<sup>3)</sup> は、メソポタミアの紀元前 2000 年の時代には、「人間は神の至福に必要な財を供給するために創造されたのだから、神々に従順でなければならない」とはっきり述べられていることを指摘し、人間には所有権がなかったことを明らかにしている (p.92)。古代においては、人間は神に従う神の従順な臣下であり、それが当然のあり方であったと考えられる。現代のように、なにかにつけ自己の権利を主張し、所有者や著者の名前の下に、社会で活動するなどということはあり得なかった。つまり、古代には、自分の活動は、仕事、発明だけでなく、愛でさえも、実は神の働きの所産であるとみなされていたようである。先ほどの Jaynes の術語を使えば、そうした時代には、二院制精神が支配していたわけで、神にすべての主体性、および所有権があり、人間固有の主体性および所有権はなかったのである。二院制精神の崩壊後、まさしく神と人間の主権争いが生じたと考えられる。

古代・伝統社会の主体図式については、アフリカ人の自我に関して Sow<sup>30)</sup> が定式化したことが全般的に当てはまるだろう。彼は、今から 30 年ほど前になるのだが、アフリカの伝統社会における人々の自我について、垂直軸は祖先との強い絆があり、水平軸には共同体の仲間との強い絆があり、この垂直軸、水平軸での集団自我 (group ego) が堅固な仕方で存在していると述べた。この集団自我は、西欧近代に始まる個人的自我 (individual ego) と対立するもので、垂直軸の頂

点には神 (ないし神々) が位置していることからして、二院制精神の名残を強くとどめ、神の権限が重きを成しており、個人の主体性、所有権は限られている。わが国においても、かつて多くの伝統社会では祖先、ひいては神々との緊密な連帯があった。この主体図式が近代そして、現代では失われ、主体図式は大きく変化していくわけである。

哲学の祖ともいわれる Socrates は、ダイモンの声を聞いた哲学者ということでも知られている。彼自身、「私には、なにか神からの知らせとかダイモンの合図といったようなものがよく起こる」と述べたという<sup>34)</sup>。これをもって Socrates は精神障害であると診断したとすると、それは軽率のそしりをまぬがれない。Socrates が生きた時代の社会・文化的なありようを見ると、この時代において、人々は神々やダイモンと共に住んでいたものであり、Socrates 自身が神への奉仕を説き、神の臣下として彼は自分自身の考えを説いた。つまり Socrates が生きた、ギリシャの高度な文化の時代にあっても、神との集合的な自我、別の言い方をすれば二院制精神が認められたのであり、その自我編成において彼らは神の声を聞き、これに従ったのである。その意味では、ダイモンの声を聞くことはなんら病的ではなかったはずである。

ところで Attali<sup>3)</sup> によると、所有 (property) の言葉はヨーロッパの中世に出現しただけのもので、その歴史は人類史においてたかだか 6 世紀あまりである (p.236)。ヨーロッパにおいて次第に経済的な発展が高まり、貴族が力を持ち出すなかで、所有が権利を意味するものとして使用されるようになっていった。あわせてこの頃、自由という言葉も集団からの自己独立という意味で初めて使用されるようになった。

伝統社会ではさまざまな物、そして身体、人の所有権は神にあったのだが、そうした所有権を神から人間へと委譲されたのが西欧近代であったということが言える。例えば近代的な家族において、親が子どもに対し所有権を持つ形で、子どもが誕生する。それは歴史学者 Ariès<sup>1)</sup> によれば 17 世紀末葉のことである。また、男性が一人の女性を

所有するという権利を保障される形で、一夫一婦制が成立する。ついでに付言すると、この女性の所有に対する女性からの反撃としてヒステリーが近代において出現したという見方も成り立つ。

西欧近代の主体図式は先ほどの伝統社会の主体図式と比べると大きくことなり、各個人は、自分の活動、仕事で得た物を所有する権利、また自分の身体を所有する権利を持つ主体と考えられる。そうした主体による所有の概念は、哲学者の Locke<sup>22)</sup> による 1689 年発刊の『統治論』において定式化された。そこでは、property の概念のもとに、自分で処分可能な財産、自分で処分可能な身体というものが人間に保障されることが述べられた。このように人間の権利を主張することは神の権限に異議を唱えることに通じるだけに、当時は大変勇気のいることで、実際、神学者から多数の批判が出た。

Descartes による『方法序説』は 1637 年に刊行されており、Locke による『統治論』の約 50 年前にあたる。Descartes は、「私が考える」ことにこそ主体の存在の自己確信の根拠があることを説いた。所有という問題枠でみると、Descartes は主体が考える事柄は自己に属し、考えるという行為自体が自己に帰属することを主張したといえる。このようにして、Descartes、続いて Lockes によって、西欧近代に始まる個人的自我 (individual ego) が順次定式化され、人々のあいだにゆっくり浸透していった。この主体図式は、各個人は自分の考え、意志、感情の所有者であり、財産、自己身体的所有権を保持する主体とみなされたという点で画期的なものといえる。何らかの発明について、発明者が特定され、その権利が法的に保証されるようになったのは近代になってからのことである。このことなど、近代的自我のありようをよく示す出来事だろう。天才がもてはやされるようになるのも、近代的自我が定着することと連動する現象といえるだろう。

この近代的な主体図式からみると、統合失調症の病理は一目瞭然である。中核症状とされる、例えば、思考奪取や注察妄想、身体的被影響体験な

どは、自分の保持している考えが他者に奪われてしまう、自分が他者の眼差しの支配下に置かれてしまう、自己身体が他者に所有され、支配されてしまうといったように、主体自身の所有権が根本から収奪された事態と捉えられる。要するに、統合失調症の病理は、所有権を基軸とする近代的な主体図式に失調をきたす病態なのである。あるいはこう言ったほうが適切であるかもしれない。つまり、統合失調症はその発生を近代的自我の主体図式を準拠枠にしており、近代的主体図式があるところで初めて出現する。例えば、自分は優れた機械を開発したといった誇大的確信をいなく発明妄想などは、近代的所有の概念を下敷きにした症状であることは間違いないだろう。

かつて島崎敏樹は、統合失調症の基本障害を「人格の自律性の意識の障害」に求めた<sup>27,28)</sup>。この規定が、西欧近代の主体意識に準拠して導かれたものであることは明らかである。人格の自律性という考えは、西欧近代に端緒をもつもので、神が絶対的な権限をもつ古代には存在しなかったと思われる。現代の多くの精神障害が、統合失調症と同様、近代的自我の主体図式を準拠枠にしてるといえる。例えば、摂食障害は、自分の身体を持つという、自己身体に対する所有意識を前提にしてはじめて出現すると考えられる。また、パルノイアは、自己の所有権が侵害されたことが不当であるとし、その復権を求め訴訟を起こすという行動から明らかのように、主体の所有権の意識を基礎にして出現すると考えられる。

## VI ポストモダンにおける統合失調症の病態変遷

Zubin<sup>38)</sup>らは 1983 年に、統合失調症が良性の変化 (benign metamorphosis) をしていることを論じた。確かに 20 世紀末葉に入る頃から、統合失調症が軽症化の方向で病態変遷をみせているように思われる。この現象は、2000 年前後から慢性化する事例がふえ、悪性の変化をきたしているといわざるを得ないうつ病と対照的である。ポストモダンとも呼ばれる現代、どうして統合失調症が軽症化したのかという問題に関して最後に少



し論じたい。

最近、統合失調症の患者から（自分は）「天皇家の末裔である。近く自分が天皇になる」とか、あるいは「CIA につけ狙われている。CIA の本部にのりこまねばならない」などといったスケールの大きな妄想的語りが聞かれることが少なくなった。それは、現代社会においてキリスト教やマルクス主義といった Lyotard<sup>23)</sup> のいう「大きな物語」が退潮したことに即応した現象といえる。彼は、ポストモダンの現代社会において「大きな物語」の代わりに、個人史、自分の病の記録などといった「小さな物語」がふえていることを指摘したのだが、この現象は統合失調症患者の語りにもあてはまるのである。

先ほど述べた二院制精神の時代においては、人間に対して神が大きな力を保持しており、世界は神を中心した「大きな物語」に支配される形で動いていたということが出来る。神から主権を奪い取った近代的主体においては、神の論理の延長線上に位置するともいえる、1 なる中心をもつ父性、男性原理が力をもった。そのため、近代的世界においても、語りとしては「大きな物語」が支配的だったと考えられる。ポストモダン社会は父性、ないし男性原理の失墜と、それに代わる、もはや 1 なる中心をもたない女性原理の台頭によって特徴づけられる。

構造論的精神分析 (J. Lacan<sup>21)</sup>) の見地からすると、統合失調症は国家権力、結婚の儀といった父性との出会いによって発症すると考えることができる。ポストモダンの現代においては、社会が女性化する分、少なくともこの種の統合失調症の発症自体が回避される事例が増えることも考えられる。統合失調症の特徴的な症状としてシュレーパー症例のように、自分が女性になることを確信するといった女性化 (féminisation) があげられるが、女性化は統合失調症の病態を軽減し、構造論的視点からは自己治癒的な作用をもち、統合失調症患者にとって、またそのリスクを持つ人にとり、庇護的に作用すると考えられる<sup>18)</sup>。このように見てくると、統合失調症の軽症化の要因の一つ

として、父性の衰退、それに代わる女性原理の台頭が挙げられる。

第 2 の要因に、これと深く関係することだが、堅固な 1 なる自律的な主体の衰退が挙げられる。インターネットにおける主体を考えてみるとわかりやすいが、人々は現代の情報・消費社会において日々配信される、さまざまな情報、宣伝といったさまざまな「小さな物語」に絶えず影響を受ける。これをもとにしてあらたに主体が構成される。ブランド商品が良い例だが、ある人がこれが好きだと言っているのをみると、それを模倣する形で自分の欲望が出てきて、同じ商品を購入する。このようにして、主体は以前に比べ自律性よりも他律性の性格を色濃く持つようになったといえる。

もともと自我は他者のイメージを取り込み、このことを無視して他者に対して優位性を保持するといった、パラノイア性の自我 (J. Lacan) によって特徴付けられる。ポストモダンの現代、自己を取り込むイメージは非常に多数化し、その結果パラノイア性自我そのものの多数化が著しいものとなったといえる。このような確固とした 1 なる中心を持たずに多数化する自我を、新たな集合的自我 (collective ego) と見ることもできるだろう。人々は、現代の高度資本主義の社会を生き抜くために、固定した場所にとどまることは許されず、こういって良ければ遊牧民のように様々な場所を移動することを強られる。その意味で、自我は Gilles Deleuze<sup>11)</sup> の意味で、ノマド化 (遊牧民化) しているといえることができる。

現実にも最近、交通機関の発達により人々の遊牧民化は進んでおり、海外移住する人はふえている。そのなかには、統合失調症圏の患者も少なくない。日本国内、海外を放浪することが、症状軽減的に作用している事例は一定程度あると思われる。ホームレスの人々のなかにも統合失調症の人がある程度存在するように思われる。長期入院患者の退院促進の動きのなか、わが国でも、アメリカに似て統合失調症は新たなノマド化の現象が認められるように思える。

IT 社会にはいって、人々は匿名で自分の顔を

みせることなくウェブサイトに関心や不満を書き込み、欲望を表明できるようになった。この匿名の社会参加は、同時に社会への文字による秘かな自己の記入の機会である。このことも統合失調症患者にとって好都合である。実際、自分の妄想的語りをインターネットで書き綴る統合失調症の患者は少なくなく、この社会参加は主体性の確認につながり、病状の改善効果をもつ。

また、現代社会における文化の多数化の動きのなか、北海道、浦河の「ベテルの家」のように、精神科医や心理療法士、ケースワーカーの指導の下に、自分の幻覚、妄想を仲間に表示し、これについておたがいに話し合う、狂気に対し許容度の高い共同体が出現している<sup>17)</sup> (p. 85-87)。この種の狂気内包性共同体も統合失調症の病態を軽減する方向で作用していることは間違いない。

さらに、現代芸術では、サミュエル・ベケット<sup>4)</sup>の作品がよい例（例えば『ゴドーを待ちながら』）だが、普通の人から見ると、何かごちない、不自然な感じがする離人症的な世界を描いた作品が評価され、劇場で上演される。このような演劇に、違和感を覚えることなく、かえって自分の心が落ち着ける場を見出す人がいることは「普通の」人からすると驚きであるだろう。「自然な自明性」の喪失を描いている作品が市民権を得ていることは、現代社会が狂気内包性を持っていることを示唆する。こうしたことも、統合失調症の病態を薄める方向で作用していることは間違いないだろう。

加えて現代において、科学的知が最大のエビデンスとして扱われ、すべてが数、量で計測化されようとし、質や感情は2次的とされる機運がある。現代人は、狐などの動物に憑依されることはなくなったものの、その代わりに数、量に憑依されているということも可能である。仕事の速さ、効率を求められる現代の産業社会を生き抜く上でも、感情が豊かであることはかえって不利になってしまう。例えば、親しい人が亡くなり、深い悲しみに長く浸って仕事を休んでいると、うつ病の診断を下され、職場を解雇されかねない。つ

まり、現代社会は「正常な悲しみ」の時間を過ごすことを許さない体制になっているのである。先にLyotardの考えに沿って「大きな物語」が消失したと述べたが、翻ってみると数、量を至上とする論理は現代版の「大きな物語」の浮上とみることもできる。

Hans Asperger<sup>2)</sup>は自閉性精神病質の大きな特徴として「欲動 (Trieb) と精神 (Geist) の正しい調和」がないと指摘した。彼からすれば、アスペルガー障害を持つ人のパーソナリティは数、論理に親和性があり、感情表出が希薄と特徴づけられる。分裂気質、分裂病質についても、同様なことがいえるだろう。現代のIT社会を生き抜くには、感情より論理優位のパーソナリティの人のほうがかえって仕事の適応がよく、有利ともいえるのである。現代社会自体が確かに「欲動と精神の正しい調和」を欠いていて、「アスペルガー障害化」しているといっても過言ではないだろう。職場では人と全く会話することなく、ひたすらコンピュータの画面を相手に仕事を行い、仕事の成果はもっぱら数値化された業績で明示されるといった生活は決して健全とはいえないだろう。そうした「アスペルガー障害化」した社会は、統合失調症圏の人にはかえって生きやすい面があるともいえるのである。

最後に、統合失調症の良性の病態変化の要因として、躁うつ病様化の現象<sup>19)</sup>をあげたい (p. 175-203)。今日、増加しているといわれる (躁) うつ病のなかに、人格構造レベルでは明らかに統合失調症とみたほうがよい事例が少なくない。そのなかには、1) 顕在発症まで病態が深まる手前にとどまっている事例に加え、2) 病歴を調べてみると、以前若い時に、幻覚、妄想などを呈し、統合失調症の診断のもとに治療を受けていた事例がある。薬物療法の寄与もあり、統合失調症の病像から中年期に近づき躁うつ病の病像へと病態変遷する事例が散見されるように思う。その種のものは、概して妄想型統合失調症に多いと思われる。

## ま と め

人類の文化・社会の推移を3つの航海になぞらえ、統合失調症の病勢との相関を図式的に示しまとめとしたい。1) 人類の第1の航海は他律志向性文化で、神にすべてを委ね、神の原理に従う他律志向性文化である。神が主体で、人間が臣下である。この二院制精神の時代には統合失調症は出現しない。この二院制精神の崩壊とともに統合失調症は少しずつ出現し始める。2) 第2の航海は西欧近代に始まる自律志向性文化である。そこでは、神に対し人間の主体性が主張され、人類は自己所有の課題を課される。この人類の出立状況において統合失調症の大量発生をみ、急性の増悪をきたす。3) 第3の航海は現代のポストモダン社会にみられる新たな他律志向性文化である。父性の衰退、自律性の希薄化、社会・文化の「女性化」により統合失調症の病勢は弱まり、軽症化現象が生じている。

## 文 献

- 1) Ariès, P. (杉山光信, 杉山恵美子訳) : 子供の誕生——アンシャン・レジーム期の子供と家族生活。みすず書房, 東京, 1980
- 2) Asperger, H. : Die "Autistischen Psychopathen" im Kindesalter. Archiv für Psychiatrie und Nervenkrankheiten, 117 ; 76-136, 1944
- 3) Attali, J. (山内 昶訳) : 所有の歴史。法政大学出版局, 東京, 1994
- 4) Beckett, S. (安藤信也, 高橋康也訳) : ゴドーを待ちながら。白水社, 東京, 1990
- 5) Burns, J.K. : A theory of schizophrenia: Cortical connectivity, metarepresentation, and the social brain. Behavioral and Brain Sciences, 27 ; 831-855, 2004
- 6) Crow, T.J. : Language and psychosis: common evolutionary origins. Endeavor, 20 ; 105-109, 1996
- 7) Crow, T.J. : Schizophrenia as the price that homo sapiens pays for language: a resolution of the central paradox in the origin of the species. Brain Res Rev, 31 ; 118-29, 2000
- 8) Dawkins, R. (日高敏隆, 岸 由二, 羽田節子ほか訳) : 利己的な遺伝子。紀伊國屋書店, 東京, 1991
- 9) Darwin, Ch. (浜中浜太郎訳) : 人及び動物の表情

について。岩波書店, 東京, 1931

- 10) Darwin, Ch. (池田次郎, 伊谷純一訳) : 人間の由来。世界の名著 39 ダーウィン。中央公論社, 東京, 1967
- 11) Deleuze, G., Gattari, F. : Mille Plateaux. Capitalisme et Schizophrénie. Editions de Minuit, Paris, 1980
- 12) Eagles, J.M., Whalley, L.J. : Decline in the diagnosis of schizophrenia among first admission to Scottish mental hospitals from 1969-1978. Br J Psychiatry, 146 ; 151-154, 1985
- 13) Hoffman, R.H., MacGlashan, T.H. : Synaptic elimination, neurodevelopment, and the mechanism of hallucinated "voices" in schizophrenia. Am J Psychiatry, 154 ; 1683-1689, 1997
- 14) Huttenlocher, P.R. : Synaptic density in the human frontal cortex: developmental changes and effects of aging. Brain Res, 163 : 195-205, 1979
- 15) Jaynes, J. : The Origin of Consciousness in the Breakdown of the Bicameral Mind. Houghton Mifflin Company, Boston, 1976 (柴田裕之訳: 神々の沈黙 意識の誕生と文明の興亡。紀伊國屋書店, 東京, 2005)
- 16) 加藤 敏 : 脆弱性モデルからレジリアンスモデルへ。精神経誌, 110 : 751-756, 2008
- 17) 加藤 敏 : 統合失調症の語りと傾聴。金剛出版, 東京, 2005
- 18) 加藤 敏 : 分裂病と宗教, 女性。創造性の精神分析。新曜社, 東京, p. 87-117, 2002
- 19) 加藤 敏 : 躁うつ病化する分裂病。分裂病の構造力動論。金剛出版, 東京, 1999
- 20) Kretschmer, E. (吉益脩夫訳) : ヒステリーの心理。みすず書房, 東京, 1961
- 21) Lacan, J. : Le Séminaire livre III, Les Psychoses. Seuil, Paris, 1981
- 22) Locke, J. (加藤 節訳) : 統治二論。岩波書店, 東京, 2007
- 23) Lyotard, J.F. (小林康夫訳) : ポストモダンの条件 知・社会・言語ゲーム。水声社, 東京, 1986
- 24) MacGlashan, T.H., Hoffman, R.H. : Schizophrenia as a developmentally reduced synaptic connectivity. Arch Gen Psychiatry, 57 ; 637-648, 2000
- 25) McGrath, M.J., Saha, S., Welham, J., et al. : A systematic review of the incidence of schizophrenia: the distribution of rates and the influence of sex, urbanicity, migrant status and methodology. BMC

Medecine, 2; 13, 2004

26) 野口正行, 加藤 敏: 統合失調症の発病率と症状についての文化精神医学知見. 精神医学, 47; 464-474, 2005

27) 島崎敏樹: 精神分裂病における人格の自律性の意識の障害. (上) 他律性の意識について. 精神経誌 50; 3-40, 1949

28) 島崎敏樹: 精神分裂病における人格の自律性の意識の障害. (下) 無即性及び自律—即—他律性の意識について. 精神経誌, 51; 1-7, 1949

29) Smith, D.L. (三宅真砂子訳): うその進化論 無意識にだまそうとする心. 日本放送協会, 東京, 2006

30) Sow, L.: Psychiatrie Dynamique Africaine. Payot, Paris, 1977

31) Sporns, O., Tononi, G., Edelman, G.M.: Connectivity and complexity: the relationship between neuroanatomy and brain dynamics. Neural Networks, 13 (8-9); 909-22, 2000

32) Stevens, A, Price, J.: Evolutionary Psychiatry.

A New Beginning. 2nd ed. Routledge, London, Philadelphia, p. 133-162, 2000

33) 鈴木道雄, 高橋 努, 倉知正佳ほか: 統合失調症—脳画像研究からみた統合失調型障害における顕在発症防衛機構. 臨床精神医学, 37: 377-384, 2008

34) 田中美知太郎: ソクラテス. 岩波新書, 東京, 1957

35) Threadgill, D.W.: Down's syndrome: paradox of a tumour repressor. Nature, 451 (3): 21-22, 2008

36) 利谷健治, 小林聡幸, 加藤 敏ほか: 統合失調症初診症例は減少しているか?—大学病院・総合病院精神科外来での初診割合の調査. 精神経誌, 108: 694-704, 2006

37) 安田 学, 加藤 敏: 高齢初発統合失調症の臨床精神病理的研究——大学病院精神科病棟入院患者を中心に——. 精神経誌, 111; 250-271, 2009

38) Zubin, J., Margaziner, J., Steinbauer, R.: The metamorphosis of schizophrenia: from chronicity to vulnerability, Psychol Med, 13: 551-571, 1983